

## 中国画顔料の研究〔2〕

于 非 闇 著  
服部匡延 訳注

### 訳者まえがき

今回は前回にひきつづき第一章・第二節～第四節を訳出する。つまりこれで第一章がおわることになる。凡例は前回と同じである。

なお、原著者・于非闇氏について、その後知りえた情報を補足しておこう。1981年12月、上海・人民美術出版社出版、俞劍華編『中国美術家人名辞典』によると、同氏は本名于照。1888年、光緒14年に生れ、1959年歿、72才。字は非<sup>かん</sup>、別に非闇のペンネームを用い閑人と号した。山東省蓬萊県の人、永く北京に住居した。清代の貢生で華北の名記者と目された。書にたくみだったが、とくに瘦金体をよくした。花木禽魚を禽魚を描いては宋画人の手法に学び、彩色は絢爛たるものがあつたが、白描の蘭・竹・水仙はもっとも清逸とされ、また印刻もよくした。解放後〔1949～〕は北京中国画院副院長・中国画研究会副会長に任じ、芸術事業に尽力した。著書には『非闇漫墨』・『都門釣魚記』・『藝蘭記』・『拳鴿記（英訳本<sup>がある</sup>）』・『中国画顔料研究〔本訳稿原書の<sup>ことである</sup>ことである〕』・『我怎樣花鳥画』がある、という。詳しくは『楡園画友録』に出ているようであるが、訳者未見。ともかく、とりあえず以上紹介申し上げておく。

### 第1章 中国画顔料の品種と性質〔承前〕

#### 第2節 植物質顔料

1 紅藍花<sup>〔1〕</sup>また紅花ともいい、蓼藍によく似ていて、花彙は球形。<sup>〔2〕</sup>早朝に花を採るのであるが、1～2日するとまた花彙から花が出る<sup>〔3〕</sup>から、出なくなるまで採りつづける。採った花は搗いて碎き、布で黄色い汁を絞りとったあと

陰乾しし、捏ねて餅にする。使うときは温水で溶かし、布で汁を絞り膠を混ぜて使用する。いまは若干の少数民族地区がこれで紅色を染めているにすぎない。むかし、われわれが慶事に用いた紅紙は、みな紅藍花と「茜草」で染めたものであつた。アヘン戦争以後、外国の洋紅<sup>〔4〕</sup>〔粉末状のカ、ミンカ<sup>〔5〕</sup>〕などが大量に流入し、紅藍花や藍澱<sup>〔後出〕</sup>は顔料市場において逐次舶来品にとってかわられてしまった。

2 茜草<sup>〔6〕</sup>蔓草で葉はなつめのものに似、四角い茎は中空。節ごとに5葉をつけ紅い花を咲かせるが、その根は紫紅色で、それを絞り、汁を煮つめて紅色顔料を製する。現在、河北省・河南省、西北地方になお野生の茜草がある。<sup>〔7〕</sup>その色は紅藍花〔から製したもの〕よりさらに紅い。

3 紫鈔<sup>〔8〕</sup>（鈔、音は礦）また紫梗ともいい、紫草茸ともいう。わが国の西南辺境に産する<sup>〔9〕</sup>薬にし電気工業面でも需用がある。これは天然樹脂の1種——虫膠である。古く唐・張彦遠はこれを「蟻鈔」と呼び、紫紅色顔料を製する原料だといっている。水に溶解しないが、使うには細かく磨って膠を混ぜるといい。

4 胭脂<sup>〔10〕</sup>また燕支・燕脂・裡蔽・臙脂とも書く。これは上述した紅藍花・茜草・紫鈔で作られるものである。伝えによると、紀元前1183年、商<sup>〔殷とも〕</sup>代紂王のとき、人びとは紅藍花の花汁ではじめて胭脂をつくり、子女の「桃花妝」としたという（『中華古今註』〔後唐<sup>馬竊撰</sup>〕をみよ）。1説では、漢の張騫が西域に使いして「焉耆」国<sup>〔いまの新疆ウイグル自治区焉耆県南方〕</sup>から「焉支」（すなわち胭脂）をもたらしたという。婦女が化粧に使う胭脂餅は「錠粉」〔前稿第1節<sup>〔5、乙をみよ〕</sup>〕と同様の〔固型の〕ものである。近ごろはこれまた「洋胭脂」（箱入りの

化粧品) にとって代られてしまった。現在では、本当の胭脂は入手がすぶる困難となっている。わたしは以前、広東省の胭脂餅を手に入れたが、その色は紫に近く、紫鉚でできたものである。また福建省の胭脂餅、杭州〔浙江省〕の綿花胭脂<sup>(11)</sup>も手に入れたことがあったが、いずれも紅藍花・茜草で製したものである。聞くところによると、甘肅省・新疆〔ウイグル自治区〕および西南辺境などの胭脂は格別に紅いというが、いまなおあるのかどうか知らない。中国画の緋紅色・紫色や朱砂の上に重ね塗りした紅色は、古代においてはすべて胭脂を主要な顔料としていた。しかし、胭脂で描いた絵は歳が経つとかならず褪色する。現在は西洋紅<sup>(12)</sup>をその代りにして、一層鮮かさを加えている。

**5 檀木**<sup>(13)</sup> また蘇木ともいい、木器を染めるのに用いるもの。色は濃紫で、使用するには煮つめて膏を採ればよい。

**6 藤黄**<sup>(14)</sup> 藤は海藤樹〔のこと〕で落葉性の喬木、高さは5~6丈。熱帯性、金糸桃科の植物である。その樹皮に孔をあけるとゴム質の黄液が流れでるから、それを竹筒で受け、すっかり乾くと中空になる。これが、われわれが絵画に使用する「筆管藤黄」である。藤黄と前節に述べた石青・石緑・銅緑とはいずれも有毒で、口に入れてはならない。

われわれがそれを買う場合、顔料店は皆それを「月黄」と呼んでいる。ベトナム産のものが最上で、ビルマ・タイ〔のもの〕はそれより劣る。商店が「越」を簡単に「月」<sup>(15)</sup>としてから、今日までずっとそれを「月黄」というのである。この顔料は唐代以前にはわが国に輸入され、真臘〔大体いまのカンボジにあった国の名〕画黄<sup>(16)</sup> とか「林邑〔インドシナ東南部の旧称〕の黄」<sup>(17)</sup>と称した。

**7 槐花**<sup>(18)</sup> えんじゅのつぼみの蕊から製したものは若葉色である。すでに開花したものから製したものは黄緑色である<sup>(19)</sup>。いずれも製法は採取して1度煮たて、そのあと捏ねて餅にし、布で汁を絞り出せばいい。とりわけ石緑を使用する場合は、かならずこれで上塗りする必要がある。

**8 黄蘗**〔きわだ。黄薬とも書く。〕<sup>(20)</sup> 北京で黄木と呼んでい

るのは四川省産のもの。色は濃黄で紙魚を防ぐことができる。煎じて溶液を作り膠を混ぜて膏を収獲して使用する。

**9 生柘**〔なまのく〕<sup>(21)</sup> 漢法薬店で手に入る。搗き砕いて皮をとり去って煎じ、膠を混ぜて使えば藤黄の代りにすることができる。

**10 花青 藍澱** (澱は) また靛に作る) をよって製する。藍澱で染色することは、わが国のもっとも早い発明である。「月令」や『説文解字』〔後漢・許慎撰〕といった古文獻に、みな藍は青色を染める草だと説いている<sup>(22)</sup>。光緒〔1875-1908〕の末になると、各地の染布はおいおい洋藍(煮藍)を用いるようになったが、中国絵画で使う花青も普魯士藍(普藍と略称)〔プルシアン〕<sup>(23)</sup>をもって製したものを採用した。いまはわずかに西南地方の苗族<sup>(24)</sup>が、なお藍を植栽し布を染めている。プルシャンブルーの色に較べると、それはより鮮やかで、日光に強くそれほど変色しない。

藍は蓼科植物で、1年生の草木。茎の高さ2~3尺。葉は楕円形で、葉柄の付け根に茎を包む筒状の托葉がある。秋季、葉のつけ根から長く茎を出し、その先端に紅い穂のような小花を咲かせる。小花には紅みを帯びた萼がある。藍澱の原料となるのは、その葉である。藍には4~5種類<sup>(25)</sup>あるが、いずれも藍澱を作ることができる。

藍澱の作り方 秋に「蓼藍」あるいは「大藍」の葉を採集し、1枚1枚木の板に敷き重ね、水を吹きつけて上に麻袋をかぶせて発酵させる。発酵したら麻袋をとり、乾燥させたあとさらに上下きりかえし、また水を吹きつけてさらに発酵させる。なんどかこのようにして発酵が止ると天然の藍澱ができあがるのである<sup>(26)</sup>。こうした藍澱は石灰で漬すよりは清潔である<sup>(27)</sup>。

画家はこうして作った藍澱を乳鉢に入れて磨りつぶすわけであるが、およそ4両〔約125グラム。前稿補注(9)参照〕の藍澱に8時間を必要とする。磨りつぶしたあと、膠水を混ぜて置いておくと澄んでくる。その後表面に浮き出たものを掬いとるのであるが、それがわれわれの需める花青<sup>(28)</sup>なのである。

**11 墨** これは中国絵画の基本色——墨色である。墨こそわが国の人民が創造し、世界に

その名を馳せてきたものである。松煙墨・油煙墨・漆煙墨の3種に分かれ、主に徽州(安徽省)で作られる(詳しくは第3章後出)。

12 百草霜<sup>(29)</sup> また灶突墨<sup>そう</sup>といい、鍋底煙ともいう。これはたき木や草を燃やした煤で、膠を混ぜて使用する。鬚や髪、羽毛を描くにはすべてこれを用いる。

13 通草灰<sup>(30)</sup> また灯草灰ともいう。通草(薬になる)を鉄の筒に入れて焼いて灰にし、膠を混ぜて使用する。蛾や蝶の類を描く専用の黒色である。

以上は広く日常的に使われる植物質顔料で、中国画家はそれらをひとまとめにして「草色」と呼んでいる。礦物質顔料に対していったもので、礦物質のものは「石色」といつている。

西洋紅ははやくから中国画家の採用するところであったが、それは動物の沈澱色料<sup>(31)</sup>で、紙の裏まで滲み透らないし、筆の毛も汚さない。旧ドイツの「大徳顔料公司」(譯) 売出しの製品は粉末で、同じく「派利堪廠」(譯)のものは塊り<sup>なまぐさ</sup>で膠が添加してある。蘇州・姜思序堂<sup>(第2章の第3に詳述)</sup>の商品は前者と同様のもの<sup>なまぐさ</sup>である。これら2種は冷水・熱湯に関係なく、腥臭さはなく値段もみな安い。西洋紅のもう1種にイギリス製があるが、色がやや暗くて濃く、筆の毛も汚さず紙の裏にも滲み透らないが、ただ臭気がある。

### 第3節 金 銀<sup>(32)</sup>

金・銀は他の顔料と混ぜ合せて中間色を作ることではできないが、中国画には必要不可欠のものなので、とくにここで述べておこう。

1 金<sup>(33)</sup> 中国絵画で用いる金は、いずれもハンマーで打ちのばした金箔の加工品である。「泥金」「洒金」「打金」<sup>(34)</sup>がある。金箔は蘇州の特産<sup>(35)</sup>で「大赤」「仏赤」の2種に分かれる。「大赤」は金本来の色をし、「仏赤」はそれよりやや赤い。ほかに「田赤」もあるが、これは淡黄色である。これらの金〔箔〕は10枚で1「帖」、1000帖で1「箱」になっている。「洒金」は中国絵画では使われない。「打金」は紙あるいは絹にまず構図を仕上げ、その余白部分に箔押し

して金地とし、そのあとさらに彩色していく。

「打金」は「雨金」「魚子金」「冷金」<sup>(36)</sup>などに分かれるが、その専門家は蘇州にいるだけである。「泥金」は金箔を小皿に入れ、膠を加えて指で磨って細泥とし、筆を浸して描くのであるが、蘇州・姜思序堂顔料店には金泥でこしらえた金丸や、膠と混ぜて小さい磁碗に塗りつけた金碗がある。また同店には洋金<sup>(銅と少量の金の合金)</sup>の金泥もあり、値段は比較的安い。

2 銀<sup>(37)</sup> 銀色は画にするとしても、用途は比較的少なく、鞍や刀矛に塗るぐらいである。銀箔も蘇州で作られる。泥金の方法と同じように、指で細かに磨り筆を浸して使用する。場合によっては銀箔と水銀・食塩を混ぜて乳鉢で磨り、そのあと水銀を蒸発させ(酒〔アルコール〕を加えて燃やす)、食塩は洗い流す。このやり方だと時間が省けるし、また磨りおろしも容易である。

また、銀箔は雄黄を用いて黄色にくすぶらせ泥にすると、金の代りに使うことができるが、しかし日時が経つと褪色する。銀泥で描いたあとでも、さらに梔黄〔くちなしから製した〕<sup>(黄一前節、9参照)</sup>で上塗りすれば、これも金色を呈し日経っても変色しない。

画面の上では、純金・純銀を使ってもかならずしも光沢はないもので、人はしばしば贗の金・銀と誤認するが、これは取扱いがまちがっているのである。金・銀を使うにはかならず膠水をたっぷり入れ、金・銀を皿の底に沈澱させ、底から筆にふくませて使えばおのずから光沢がでる。これが他の顔料とは使用の際の異なるところである。

### 第4節 膠 礬

中国絵画の色彩が鮮明で歳を経ても変わらないのは、画家たちのたえまない労働と創造の結果なのである。一方では原〔顔〕料を選びぬき加工精製し、一方では膠・礬を利用して顔料が剥落しないよう固着させた。水に溶けない原料であるのにもかかわらず、その色彩が鮮明で変色せず、またそれを画面に固着しえたのは、とりもなおさず膠と礬との功用である。いま、それ

それぞれについて述べよう。

1 黄明膠<sup>[38]</sup> また広膠ともいい、広東省・広西〔壮族自治区〕に産する。牛馬の皮筋・骨角をもって製したもの（牛馬などの皮筋・骨角中の硬蛋白質に水を加え、加熱分解してできる新しい物質）である。透明な黄色で4角い棒状をし、臭味はない。水を加えとろ火で融かすのであるが、顔料には上澄みだけを用い、下層の濁ったものは使わない。

2 阿膠<sup>[39]</sup> また傅致膠<sup>[40]</sup>ともいう。これも牛馬など獣類の皮筋・骨角をもって製したもの。山東省陽穀県の東北60里の阿井で産する。阿膠に3種あり<sup>[41]</sup>〔1つは〕さらっとしていて透明、淡黄色でとくに顔料用とされる。もう1つは澄んではいるが色の濃いもの、あるいは漆のように黒いもので薬用とする。その他の濁ったものは器物の接着に使うだけである。画家が使うときは、これも水を加えてとろ火で融かし上澄みだけを用うる。

3 瓶膠水<sup>[42]</sup> これはありきたりのガラス瓶に入った膠水である。これを顔料と混ぜて用いると、第1に顔料固有の色に妨げとならない。第2にそれ自体光沢を出さない。第3に防腐剤を入れてあるので、夏季、臭気がしないし腐らない。第4に凝集力と付着力は黄明膠や阿膠に遜色がない。わたしはこれを使って10年になるが、顔料が剥落するといった欠点を見つけないばかりか、使用に際しては特別簡便かつ清潔である。ただし値段は多少高い。近ごろグリセリン入りの瓶膠水があるが、使わない方がよろしい。

4 明礬<sup>[43]</sup> また白礬ともいい、渋味がある。礬石を加熱してできる。半透明で水晶に似ている。安徽省廬江県〔于氏は廬を廬に作る〕が主要な産地である。中国画のうち水墨画と着色の大写意画<sup>[44]</sup>を除いては、おおむねみな礬水〔どろ〕を用いて顔料を固定させている。顔料を幾層か重ねる画であれば、1～2層ごとに多少うすめのどろを上塗りする必要があるが、1番下層の顔料はことにその必要がある。これは顔料を重ねていくとき、下の顔料が動いてしまうのを防ぐためである。たとえば、まず朱砂を1層塗ったとする。

それがどんなに濃い膠を使ったとしても、もしどろを上塗りしないとすると、その上に胭脂色を重ねて濃淡をつけようとしても、朱砂はきまって動き出し胭脂と混じり合ってしまうにちがいない。どろを塗っておけば朱砂は固着して動かず、どのように塗りがぶせることも可能である。

なお、生紙〔「六吉料半」「六吉棉連」<sup>[45]</sup>—生紙の名称—のような〕を熟紙にするにも、かならず膠礬水〔どろ〕を生紙に刷かなければならない。生紙は墨を塗るとききまって滲んでしまうが、どろを刷いておけば滲むことはない。そこで熟紙というわけである。生絹を熟絹—また絵絹ともいう—にするのも、この方法を用いるのである。

われわれが絵絹を使って画を描いているうち、ときとして絹地を汚してしまったり、あるいは描いてしまったところの1部分の感じがどうもしっくりしないとか、あるいは書いてしまった字句にまちがいを見付けたときは、膠を使ってそのところを消したり、もとの白絹にもどすことができる。その方法は、黄明膠もしくは阿膠を煮て濃い膠汁をつくり、それを消したりたい個所に注ぎ、自然に乾くのを待ってから絹のたて・よこを押えつげながら、力を入れて斜めに引っぱると膠の破片がパラパラと裂けて落ちるのであるが、消したりたい個所〔の汚れ〕も膠片と一緒に落ちてしまい、白い絹地が現われるというわけである。この方法は油汚れでなく、裏までしみとおっていない墨や色でさえあれば100パーセント効果がある。注ぎかけた膠汁はかならず自然に乾燥させるべきで、火に焙ったり日光にさらしたりしてはいけぬ。また絹のまわりをぴったり押しつけてもだめで、ゆるみのあるほど落しやすいのである。

#### 補注

〔1〕紅藍花 これも前稿の鉛粉や、後述する胭脂と同様、張騫が西域からもたらしたとする伝えがある（西蕃・張華撰『博物志』）。渡部俊三氏によれば、キク科ペニバナ属栽培起源の中心は、インド・アフガニスタン山岳地帯・エジプト・ナイル河上流地域と考えられるという

(文献<sup>1</sup> P.60所引)。とすれば、張騫将來說はともかく、西方伝來說は事実を伝えていることになる。張華はつづけて、中国3世紀現在、紅花栽培の分布について「いま唐・魏の地またこれを種く」という。「唐」というのがよくわからないが、「魏」が西晋前代の三国魏(曹魏)の旧地を指したものとすれば、大まかにいって長城以南、淮河流域・秦嶺山脈・渭河流域以北の東西に長い中国北部地域ということになる。『新唐書』(地理)に挙げている紅藍花進貢地をみると、靈州靈武郡(寧夏回族自治区)・青州北海郡(山東省益都県)・興元府漢中郡(陝西省南鄭市)・蜀州唐安郡(四川省崇慶県)があり、はみ出す部分(蜀州)もあるが大体曹魏旧領に重なる。

北宋時代では、蘇頌の『図経本草』・掌禹錫等『嘉祐本草』によれば、ともに「[紅藍花は]梁・漢および西域に生ず」と伝えられているが、この「梁・漢」も前代の後梁・後漢の旧地をいうものとする、両者ががいにお互いにオーバーラップしながら大体上記曹魏の旧域と同じである。なお『図経本草』は「いまは處處にこれ有り」というから、当時その栽培地は北宋全域に分布していたらしい。

- [2] この部分、原文は「球形花彙」とある。「花彙」というのが具体的にもう1歩よくわからないが、紅花は株から出た枝の先端ごとに玉葱状の苞があり、その上に150前後の管状の小花が咲く。その状況を『図経本草』の記述を借りていうと「夏すなわち花あり。下に椀を作る、刺多し。花芯は椀上に出づ」となる。于氏のいうのは、この「椀」すなわち玉葱状の苞をいったものかと思われる。
- [3] この部分、原文は「早晨採花、一二日又由彙上生出、直到採完為止」とある。これは『図経本草』に「花芯は椀上に出づ。圃人露を承けてこれを採る。採れば己にしてまた出づ。尽くするに至りて罷む」とあるのを承けたものか。ただし、花は枝ごとに順次咲くのであって、同じ苞にまた花がつくわけではない。
- [4] 洋紅麵 粉末の洋紅をいったものか。絵具としての洋紅はカルミン(カニンミンとも)紅素と澱粉でつくられ、棒状に固めたものより粉末の方がよいという(文献<sup>2</sup> P.71)。その紅素の原料はコチニール・レーキで、メキシコや中央アメリカなどのサボテン等につく小さい昆虫(紅虫・エンジ虫)の腹中に貯えられる色素からつくられる。その色素は16世紀なかごろ発見されたという(文献<sup>3</sup> P.152~3 文献4, P.60)。
- [5] 品紅 一品紅・礮性品紅・复紅ともいい、フクシン、マゼンタをいう(文献<sup>5</sup>)。ドイツではフクシン、イ

ギリスではマゼンタといい、アニリン色素の合成顔料で、かつてドイツで主に製造されたらしい。日本では、おもしろいことにこれを唐紅と称した(文献<sup>2</sup> P.73)。

- [6] 茜草 古く『詩経』鄭風に茹蘆とあるのが茜草のことだという。とすれば、中国でははやくから知られた染料の1つである。他に茅蒐・蒨・地血などの異名が伝えられているが『本草綱目』(巻<sup>18</sup>)・『植物名実図考長編』(巻<sup>10</sup>)に引く、西晋・陸機の『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に「齊人これを茜と謂い、徐州の人これを牛蔓と謂う」とある。齊は山東省を中心とする一帯、徐州はその南に接し、現在の徐州市を含んだ広域をいったものであろう。永い時間の経過と拡がりの過程で、いろいろな異名を生んでいったものと思われる。
- [7] 茜草の産地として『名医別録』に「喬山の山谷に生ず」とある。喬山は黄帝の葬地として伝えられているところが(『抱朴子』内篇、極言)、河北省涿鹿県の東南にある。また喬山は橋山とも通じるが、そうだとすれば山西省襄陵県・陝西省中部県(現<sup>黄</sup>陵県)付近の2か所が加えられる。後者にも黄帝の塚と伝えられるものがある(文献<sup>6</sup>)。『名医別録』にいう喬山は河北省のものを指しているのではないかと思うが、いまにわかには決めがたい。陶弘景はこれに注して「東は間諸処にすなわち有れども少なく、西の多きに如かず」という。これが北宋まで降ると「いま近き処みなこれ有り」(『図経本草』)ということになる。
- [8] 紫鈿 『歴代名画記』(巻<sup>2</sup>・文献<sup>7</sup> P.122)に「南海の蟻鈿(紫鈿なり、粉燕脂を造る。『異録』(晋・張勃著)には、これを赤膠と謂う。)とある。唐・段成式の『酉陽雜俎』(巻<sup>18</sup>、木篇)に「紫鈿樹(鈿は鈿の誤り)」。真臘国(カンボ)より出づ。真臘国呼びて勒佉となす。また波斯国(東南アジア地方一後述)より出づ。樹長一丈、枝条鬱茂し葉は橘に似たり。冬を経て凋み、三月、花を開く。白色にして子(実)を結ばず。天の大いなる霧露及び雨の沾濡すれば、その樹の枝条すなわち紫鈿[鈿]を出だす。(中略)真臘国の使い(中略)云く、蟻、土を運んで樹端に窠(洞穴状の巢)を作る。蟻壤、雨露を得て凝結し紫鈿[鈿]となる。崑崙国(ビルマ南)は善く波斯国はこれに次ぐ」とある。同時代の『唐本草』によって多少補記すると、紫鈿は「蟻、海畔の樹藤の皮中にこれを為る。(中略)正に蜂の蜜を造るがごとし」といい「紫鈿樹、名は渴廩」という。
- これらのことを今日の知識をもっていうと、アジアの熱帯地方に生育するFicus indicaおよびFicus religiosaなるイチジク属の樹木に、Coccus laccaという小虫ラック・カイガラムシが寄生し、紫鈿はそ

の小虫が分泌した樹脂状の物質（ラック）である、ということになる（文献8）。上記『酉陽雜俎』にある「勒法（ローキヤ）」がこれに当る（文献9）。また「蟻」とは、前記の小虫ラック・カイガラムシをいったものである。

顔料はこのラックから抽出するわけであるが、その色素はカルミン色素に似た成分で、耐久性のある良質の紅色素だという（文献4）。

(9) 紫鍾の産地については、唐・李珣の『海薬本草』に引く『広州記』では「南海の山谷」といい、『歴代名画記』でも「南海の蟻鍾」といっているが、その『名画記』が引いた『呉録』はもっと限定的に「九真移風県」の名を明記する。九真郡はハノイ、ユエ間一帯の地域を占め、移風県はその北半部にあったが、米沢氏はこれを旧清化県、いまのThanh hoaに比定する（文献8）。また、『図経本草』に引く『交州地志』なる書には「本州〔交州のこと〕は歳に紫鍾を貢す」とあるという。交州は時代によって移動しているので固定してはいえないが、おおまかにいって広東省以南、ヴェトナムにまたがる地域にあった。前注『酉陽雜俎』にみえた「波斯国」については、これを一般的にいうペルシアとする解釈もあるが（文献7）、ラウファーによればマライ半島、南海、ビルマ一帯の地域内であったとされるポーサー、これを「マライの波斯」とする今村説がよいようである（文献9 pp.247~8）。「崑崙国」と呼ばれたところも東南アジアに古くなんか所があったが、今村氏はまた、この場合はビルマ南部、サルウィン河口一帯にあった国とするのが妥当だろうとしている（文献9）。従っておく。

なお『新唐書』（地理志）には紫鍾の進貢地として、福祿州唐林郡・武安州武曲郡の2か所を挙げている。どちらも現ヴェトナム北部地域にあった。

ところで、本文中、于氏は紫鍾産地として広東省・旧広西省あたりを指すかと思われる中国「西南辺境」を挙げているが、米沢氏が推測するように、『名画記』にいう「南海」を于氏が上記両省一帯と解釈した結果であろう。たしかに、この辺りは秦以来、広州に南海郡治が置かれたように、広く南海と呼ばれていたから、于氏の解釈もいちがいに否定できない。しかし、これまでみてきたように、紫鍾の産出中心地は広東・旧広西のずっと南西地域にあるのであるから、『名画記』や『広州記』にいう「南海」もその辺りに求められるべきであろう（文献8）。

(10) 胭脂 李時珍は燕脂を標記し、それに4種ありと

する（『本草綱目』巻15）。1つは胡粉を紅藍花汁で染めて製したもの。李氏は唐・蘇鶻の『蘇氏演義』に見えると述べているが誤りで、じつは晋・崔豹の『古今註』（巻）に書いてある。

1つは唐・段公路の『北戸録』を引いて、山燕脂の花汁を同じように使って製したとするもの。引用によれば、その花は蓼に似、葉は藍に似、端州に叢生し、土地のものはそれで燕脂粉もつくり、布も染めるのだと述べているが、詳しいことはよく分らない。端州は端溪硯で知られ、いまの広東省高要県のこと。

もう1つは山榴花汁から製したとするもの。唐・鄭虔の『胡本草』（佚）に見えるという。山榴花汁というのは『天工開物』（上巻）にも出ているが、詳しいことは書かれていない。平安時代、源順が著した『和名類聚鈔』（巻）は、唐代の書『兼名苑』なるものを引いて「山榴はすなわち山石榴なり」といい、和名は「阿伊豆々之（あいつ）」だと訓じている。要するに「きつき」の1種であるが、この「阿伊」というのは、開花時期つまり「間（あ）」からきたものという見方があり、（文献10）、「あいつ」、色のことではないらしい。『本草綱目』（巻17）の「羊躑躅」の項の付録に「山躑躅」のことが書いてあり、それによると「二月始めて花を開く。羊躑躅の如くして蒂（た）は石榴（ざく）の如し。花に紅なるもの、紫なるもの、五出するもの、千葉のものあり。……一名紅躑躅、一名山石榴、一名映山紅、一名杜鵑花。」とあり、山榴花から製した胭脂というのは、こうした「きつき」の紅いものから採取したのであろう。

最後の1つは紫鍾を綿にしみこませて製したものである。これはまた胡燕脂ともいう。前出の『海薬本草』にみえるという。『天工開物』（巻上）に「燕脂。古の造法は紫鍾をもって綿を染むるものを上となす。紅花汁および山榴花汁はこれに次ぐ。近ごろ濟寧路（山東省西部の南部）は染残の紅花滓を取ってこれをつくる。値はなはだ賤し。その滓の乾したるもの、名づけて紫粉といい、丹青家（墨家）あるいは収用す。染家はすなわち糟粕として棄つるなり」とあるのはこれである。

小口八郎氏によれば、紅花は染料としてはいいけれども、褪色しやすいため、唐代ごろから中国にもたらされた耐久性のある紫鍾製胭脂が使われるようになったという（文献4）。

(11) 棉花胭脂 胭脂を棉（ヤン）にしみこませて乾燥したものである。綿を使うものもあり、日本では一般に綿胭脂と書く。これを湯でもどして使用するのである（文献4）。

(12) 西洋紅 前出の洋紅・品紅などの化学赤色顔料を

総称したものであろう。

[13] 檀木 これは普通「まゆみ」のことであるが、この場合は「蘇木」つまり蘇枋木のことである。その木片から色素をとる。『唐本草』に「南海の崑崙（補注<sup>9</sup>）よりきたる。しかして交州・愛州（いすれも、いまのベトナム北辺地域）またこれあり」とある。

[14] 藤黄 インド・タイ・中国南部等に生育する海藤樹（ガウルニア科）からとれるゴム質の樹脂である（文献4・）。日本では「しおう」と読みならわしてきたので、しばしば雌黄と混用されやすかったことは前稿補注18で指摘した通りである。

一方、中国本土でも古くから藤黄といい、海藤というものがあつた。『海薬本草』に引く、晋・郭義恭の『『広志』という書によると「〔藤黄は〕岳（湖南省岳陽県）・鄂（湖北省武昌）等の州の諸山屋に出づ。樹を海藤と名づく。花に芯あり、石上に散落す。かの人〔びと〕これを取む。これを沙黄という。樹に就きて采れるものは軽妙なり、これを臘黄（あやま）という。今人訛りて銅黄となす。銅は藤音の謬なり。（中略）画家および丹竈家（方術家・錬金術士）時にこれを用う」とある。李時珍は、これに対して「いまの画家が用うるところの藤黄は、みな煎煉を経て成れるものなり。これを舐むれば人を麻〔麻〕れしむ。〔元の〕周達観が真臘〔風土〕記に云く、国に画黄あり、すなわち樹脂なり、番〔蕃〕人、刀をもって樹枝を斫るに滴り下る、次年これを取むと。郭氏の説に似たれども、微かに同じからず。すなわち一物なりや否やを知らざるなり」として疑問を遺している。いまここで、どうという結論を出せるわけもないが、とにかく色料として似たようなものが、中国にもあつたことがわかる。

それはそれとして、小口氏によれば、トルファンから出土した唐代木彫仏に、黄土で彩色した上をさらに藤黄で仕上げ塗りしたものがあつたことである。

（文献4・）  
（P.61）

[15] 越も月も、音yueの第4声で同音であることからきたのであろう。

[16] 真臘画黄 補注〔14〕所引、周達観『真臘風土記』の文に「画黄」とあるものである。

[17] 林邑の黄 これは藤黄ではなくて雌黄のことであろう。『歴代名画記』（巻<sub>2</sub>）に「林邑・崑崙の黄 雌黄なり」とみえている。これはまた崑崙黄と呼ばれたことが『名医別録』に出ている。前稿原注〔2〕および同補注〔18〕参照。

[18] 槐花 『名医別録』は産地を河南省とするにとど

まるが、宋のころまでには「処処にこれあり」（『図経本草』）となる。

[19] 李時珍が「その花いまだ開かざるとき、状は米粒のごとし。炒過（い）煎水（煮）し、黄に染むるに、はなはだ鮮やかなり」（『本草綱目』）というように、普通は黄色の染料であるが、緑色を出すには藍澱・青礬をかけるということが『天工開物』（土巻の3・大紅官緑色）にみえる。

[20] 黄蘗 『本草綱目』（巻<sub>35</sub>）は蘗木を標記する。『名医別録』には「漢中（陝西省南鄭市）の山谷および永昌（雲南省保山県）に生ず」とあり、陶弘景は「いま邵陵（湖南省邵陽市）に出づるものは軽薄にして色深く、勝るとなす。東山（雲）に出づるものは厚くして色浅し」と注する。北宋・掌禹錫等著の『嘉祐補註本草』（以下『嘉祐本』）では「いま所在にあり。もと房（湖北省房県）・商（陝西省商県）・合（四川省合川県）等の州の山谷中に出づ」とある。また同じころの『図経本草』では「処処にこれあれと、蜀（四川省）に出づるもの、肉厚く色深きをもって佳となす」とある。

[21] 生梔子 梔子は卮子とも書き、木丹・越桃・鮮支などの異名がある。その果実から黄色の色素をとるのである。『名医別録』に「南陽（雲）の川谷に生ず」とあり、陶弘景は「処処にこれあり、（中略）染家に入る」と注する。『唐本草』では「いま南方および西蜀の州郡はみなこれあり、（中略）南人競って種まき、もって售利す」といっている。

[22] 「月令」は『礼記』第6篇の篇名。その仲夏の月（いまの4月に当る）の条に「民に令して藍を艾〔刈〕りてもって染むることなからしむ」とある。また『説文解字』は于氏の引く通り「藍は青を染むる艸（き）なり」といっている。

[23] 普魯士藍 単に普藍とも。人工の無機顔料で、日本・中国では紺青といっている。これには多くの呼び名があり、ミロリ・ブルー、鉄青、ベレンス、支那青、ベルリン青、金青などともいう（文献3・）（P.136）。中国で洋藍といっているのは、これらの統一呼称であろう。顔料の性質としては、その異称に対応して、ある程度の化学的構造にちがいはあるらしく、支那青と呼ばれているものは上等品で、ベレンスは日光や酸には強いがアルカリには変化をしやすいなどのことがいわれている（文献2・）（PP.125~6）。また上記の異称は色合いのちがいにもよるらしく、製法によって純青色のものから赤味の多いもの、ブロンズ光沢を有するものまで多様だといふ（文献3・）（PP.137~8）。

[24] 苗族 ミャオ族という。中国少数民族の1つであ

るが、人口は比較的多く、250～60万人を擁するといわれている。貴州省を中心に、湖南西部・広西北部・雲南東部一帯、つまり「中国西南地方」に分布している(文献11、P.816)。

- [25] 『天工開物』(上巻)は澱をつくる5種の藍として茶藍(苧藍)・蓼藍(たいてい)・馬藍・呉藍・苧藍を挙げるが『本草綱目』(巻16)では、苧藍の名がなく木藍が入っている。

このうち蓼藍は広く知られる種類であるが、苧藍と大藍(本文で、のちに出てくる)は、牧野富太郎はこれをあぶらな科の和名「たいせい(大菁)」とする(文献12)。

馬藍は「おおあい」とするもの(文献13)、「りゅうきゅあい(琉球藍)」とするもの(文献5)などがある。唐・蘇恭が、藍の1種として「葉円く径二寸許り、厚さ三、四分のものは青を染むるに堪う。嶺南太常(木詳)に出づ。名づけて木藍子となす」という(「唐本草」)、その木藍が『本草綱目』(巻16)が批判するように「蘇恭は馬藍をもって木藍となす、(中略)非なり」であるとするならば、嶺南のミャオ族はあるいはこの種の藍を原料としたのかも知れない。

呉藍は和名未詳。「呉人これを種まく」(「本草綱目」)とあるから、江蘇省を中心に栽培されたものであろう。

苧藍は『天工開物』に「近ごろ蓼藍の小葉なるものを出だす、俗は苧藍と名づく」とあり、「たてあい」の1種と思われる。

木藍は『倭名類聚鈔』(巻14)に「和名、都波岐阿井(つばきい)」とみえている。この木藍も、中国では嶺南で産出された(「図経本草」)。前述、『唐本草』の「木藍子」が正しくは「馬藍」のことで、『図経本草』にいう「木藍」が、これはこれで正しいのだとすると、中国西南部は天然藍に恵まれ、いまなおミャオ族が昔ながらの材料で藍染めを保持しているのも納得できよう。

- [26] 藍葉の発酵が止まった段階のものを、わが国では「すくも」と呼んでいる。于氏はこれを藍澱といっているわけであるが、その当否はにわかには判定できない。

[27] ここに于氏が述べたことは、わが国で「発酵建て」といっている方法で、これは日中両国とも後世に開発された製法らしい。それ以前、すくなくとも明代までは、いわば「沈澱法」とでもいうべき方法が用いられた。『天工開物』(上巻)に「澱をつくるのに、葉と茎が多いばあいは穴倉に入れ、少ないばあいは桶や甕に入れる。7日のあいだ水に浸すと、液汁が自然に出てくる。その液1石について石灰5升を入れ、数10回かきまぜると、澱のもとが固まる。液が安定した時、澱

は底に沈む」とある(文献P.82)。

これにより前の6世紀、北魏・賈思勰の『齊民要術』(文献15、巻7所引)も似たような製法を伝えているが、多少の異同があり、原料の藍草をおもひで押しつけること、加熱冷却すること、10石の甕につき石灰1斗5升を入れることなどの工程をへ、沈澱物は「別に小坑を作りて藍澱を貯え、坑中に著きて強粥(かたゆ)のごとくなるを候ち、また甕中に出だしてこれを盛れば藍澱成る」としている。

- [28] 花青 たとえば清・王概の『芥子園画伝初集』(設色(答法))の記事と対照させてみると、これは靛花(てんか)というものに当る。普通これは陰乾して保存されるようであるが、『本草綱目』(巻16)は「すなわち青黛なり」としている。王概は福建産の靛花が上等だといっている。

[29] 百草霜 『本草綱目』(巻7)は竈突墨・竈額墨の異名を挙げています。また、この墨煙は「その質は軽細、故にこれを霜という」とも釈する。

- [30] 通草灰 『本草綱目』(巻18)に木通・附支・丁翁・万年藤などの異名を挙げる。『名医別録』は「茎に細孔あり、両頭あい通ず。一頭を含んでこれを吹けば、すなわち氣かの頭より出づるものは良し」といい、『倭名類聚鈔』は、これを「阿介比加都良(あけびかすら)」と訓ずる。

しかし、この草は問題があり、北宋・蘇頌は「今人これ〔通草〕を木通といい、俗間いところの通草はすなわち通脱木なり」とし(「図経本草」)、李時珍もこれに従っている。通脱木には通草・活菟・離南などの異名があり、日本で「かみやつで(紙手)」と称するものに相当するという(文献10、つうだつぼく)。

于氏がここで通草といっている植物が、どちらのことであるのかははっきりしない。

- [31] 動物の沈澱色料 コチニール・レーキのことであろう。補注[4]参照。

[32] 中国における金・銀の生産については、先秦から明・清におよぶ学術的展望が夏湘蓉氏等著『中国古代礦業開発史』(1980年、北京・地質出版社)にあり、とくに唐・宋時代については精細な研究が加藤繁博士によって『唐宋時代に於ける金銀の研究』(大正14年、東洋文庫)としてまとめられている。これらに書かれている関係事項は、それを要約するだけでも多くの紙数を必要とするので、ここでは文献名を掲げるとどめる。

ただし、上記の研究ほど厳密にはなく、いくつかの時代の金・銀産出地について、その時代の人たちが



注目したものを、本稿で慣用してきた文献によって示すことにする。

[33] 金 『名医別録』に「金屑は益州〔四川省〕に生ず」とあり、陶弘景は注して「金の生ずるところ処処にみなあり。梁〔陝西省西南と四川省の南東〕・益・寧〔雲南省〕の三州多くあり。水沙中より出づる屑と作す。これを生金という」とし、さらに「建平〔福建省〕・晋安〔福建省〕もまた金沙あり」という。また降って、唐・陳藏器は「生金は嶺南〔広東省・広西壮族自治区〕の夷、獠〔当時の蛮族の名〕の峒穴山中に生ず」と伝えている〔本草拾遺〕。同じころ、劉恂はその著『嶺表録〔嶺表録異記とも〕』に富州〔広西昭平県〕・賓州〔同賓陽県〕・澄州〔同桂林県〕など中国南部の産地を紹介している。北宋になると、蘇頌の『図経本草』では「采〔採〕ることまた多端」の地として、饒州〔江西省〕・信州〔江西省〕・南劍〔福建省〕、そして澄州の名が挙がっている。

宋応星は明代において、「およそ中国産金の区〔地域〕は、大約百余処あり。もって枚挙し難し」と伝えているが、その中からとくに雲南の金沙江、四川北部の潼川〔綿陽地区〕、湖南の沅陵、同淑浦などを挙げている〔天工開物〕。

これらを概観すると、中国の産金は宋応星のいうごとく「金は多く西南に出づ」ということができる。

[34] 泥金・洒金・打金 泥金については本文参照。洒金は灑金と同じく、砂子を吹きつける、あるいは蒔くこと。打金は箔を押すことか。同時に、そうした技巧に適した規格の金をも指すのであろう。なお專家の御教示を俟ちたい。

[35] 蘇州における金箔について『天工開物』がつぎのようなことを書いている。

金箔をつくるには、金の薄片を烏金紙という紙に包んで叩き延ばすのであるが、「およそ烏金紙は蘇州〔蘇州〕・杭〔州〕に由いて造成す。その紙は東海の巨竹膜を用いて質となす」と。「竹膜」とは藪内氏がいうように竹麻つまり竹の繊維のことであろう〔文獻14〕。P.261。「東海の巨竹」は江南地方に叢生する孟宗竹かとも思われるが、はっきりしない。場所としては江蘇・浙江・福建あたりのことであろう。宋応星は同書中の別なところで「およそ竹紙をつくる、ことは南方に出づ。しかし閩省〔福建省〕独りその盛を専らにす」と書いている。

蘇州における製箔業については、いろいろな要因が考えられるであろうが、特殊な箔打紙との関係も見逃がせない。

[36] 雨金・魚子金・冷金 雨金・魚子金は粒の大きさによる名称か。冷金は白っぽい金のことか、もしくはは

「散らし金」〔文献5〕とする解釈もあるが、具体的には未調査。後考に俟つ。

[37] 銀 『名医別録』は「銀屑は永昌〔雲南省〕に生ず」という。永昌という地名は数箇所あるが、陶弘景が「永昌は……いま寧州〔雲南省〕に属す」というに従う。唐代では蘇恭が、金はあちこちから出るけれども「虢州〔河南省〕のものををもって勝となす」と伝える〔唐本草〕。北宋では饒州〔江西省〕・樂平〔江西省〕の礦坑が知られている〔馬志著「開宝本草」〕。

降って明代になると『天工開物』が『本草綱目』などよりも具体的に、饒州・信州〔江西省〕・瑞州〔江西省〕・辰州〔湖南省〕・銅仁〔貴州〕・宜陽〔河南省〕・永寧〔河南省〕・盧氏〔河南省〕・嵩山〔河南省〕・会川〔四川省〕・甘肅大黄山〔甘肅〕などを列記し、しかしこれらの産額を合計しても雲昌〔保山〕・大理〔雲南〕・曲靖〔雲南〕・姚安〔雲南〕・鎮沅〔雲南〕を挙げている。銀もまた西南地方が豊富であった。あるいは北部は採鋳しつくしたのかも知れない。

[38] 黄明膠 牛皮膠・水膠などの異名がある。唐・甄権は「白膠、一名黄明膠」としているが〔本草〕、李時珍は「案ずるに本経〔神農本草経〕に白膠、一名は鹿角膠。鹿の角を煮てこれを作る、と。その説はなほだ明らかなり。黄明膠はすなわち、いまの水膠なり。すなわち牛皮もて作るところ、その色は黄にして明。白膠にあらざるなり」として訂正している〔本草綱目〕。

また、北宋・蘇頌は「いま方家〔道士・錬金術士〕用うところの黄明膠は、多くはこれ牛皮。本経に、阿膠はまた牛皮を用う、と。この二膠また通用す。ただ、いまの牛皮膠は制作精ならず、故に用うるに堪えざるなり。止もって物を膠するのみ」といっている〔図経本草〕。

[39] 陶弘景は『神農本草経』に注して「東阿〔山東省〕に出づ、故に阿膠と名づく」という。北魏・酈道元の『水経注』には「東阿に井あり、大きき〔車〕輪のごとし。深さ六、七丈。歳ごとに常に膠を煮て、もって天府〔朝廷〕に貢す」とある。『図経本草』は「いま鄆州〔山東省〕またよくこれを作るも、阿県城北の井水をもって作煮せるものを真となす。その井、官禁なり。真の膠は極めて得がたく、貨するものは多くは偽りなり」として、北宋ごろの事情を伝えている。

李時珍は、その造膠について、期間を10月から翌年2～3月までの間とし、「犂牛・水牛・驢〔ろ〕の皮を用いるものを上となし、猪〔豚〕・馬・騾〔ら〕・駝の皮はこれに次ぐ」という〔本草綱目〕。

[40] 傳致膠 「傳致の膠」には多少問題があり、『歴

代名画記』の『学津討原』(清・張海編)所収本を底本とし、『津逮秘書』(明・毛晋編)および『王氏書画苑』(明・王世貞編)所収本をもって校合したという「小野訳本」(文献15)は「張本〔原〕本」は〔傳を〕傳に作る」と校勘したうえで「傳致膠」を採り、上記3本に加えて、さらに『文津閣四庫全書』所収本を対照させた谷口鉄雄編『校本歴代名画記』(昭和56年、中央公論美術出版)も「傳致膠」としている(ただし、本書は小野氏が指摘した張本の傳字には触れていない)。また文献13も「傳致膠」とする。

一方、流布本『本草綱目』(巻50)は阿膠の異名として「傳致膠」を用い、于氏もまたこれに従っているわけであるが、長広敏雅氏も『歴代名画記』にある「百年傳致之膠、千載不剝」の「傳致」は阿膠の異名「傳致膠」にかかわるものとして、これを「傳致」と読み、「百年も傳致の膠を用うるならば、千年たっても剥げおちない」と訳している(文献7 p.126)。同氏によれば、傳致は「付着する、敷く、のべるの意」である。諸橋氏によれば「つけそえる、無理にこじつける」とある(文献13)。

これらの語釈に従って、さきの引用文を訳してみると「百年もくっついている、ある敷きのべた膠を用いるならば、千年たっても剥げることはない」となるであろうが、これでは意味がはっきりとは受取れない。これをもし傳致、つまり伝達ないし伝来の意として解すると「百年という年月伝えられてきた膠を用いるならば、云々」となって、意味はよりはっきりしてくるのではあるまいか。もちろん「百年」というのは「古い」、「できたてでない」ことの数量的表現であろう。とすれば、于氏が第1節、原注(2)に補記しているように「阿膠はいままできのものを使わない」といつていることとも整合する。

なお、『本草綱目』によれば「傳致膠」は『神農本草経』以来の伝統的名称のごとくであるが、これも諸本との校勘が必要と思う。しかし、いまは問題を指摘するにとどめたい。

- [41] 陶弘景は『名医別録』に注して「膠に三種あり。清にして薄なるものは画家の用、清にして厚なるものは覆盆膠と名づけ、薬用に入る。濁りて黒きものは薬に入らず、ただ物を膠すべきのみ」といつている。
- [42] 瓶膠水 このものの成分ははっきりしないが、アラビア・ゴムあるいは澱粉質の糊に防腐剤を添加したものを瓶詰めにしてあるのであろう。
- [43] 金属の硫酸塩に属する礬石は、その地色や焼いてみたときの呈色などによって5種に分けられているが、

明礬はそのうちの白礬である。古く『名医別録』は「礬石は河西〔陝西省・甘肅省および寧夏回族自治区一帯〕の山谷および隴西〔甘肅省〕・武都〔甘肅省〕・石門〔湖南省?〕に生ず」といつている。陶弘景は注して、益州〔四川省〕の北部・西川〔四川省西部〕の地域を追加している。唐では西方産のものも流入したらしく、李昉が「波斯〔これはペルシャであろう〕・大秦〔ローマ帝国東方領域〕出すところの白礬は(中略)功力は河西・石門を越ゆ」といつている(『海薬本草』)。

降って、北宋の『図経本草』は晋州〔山東省臨汾市〕・慈州〔山西省吉県〕・無為州〔安徽省同県〕の地名を挙げている。『天工開物』では、このうち慈州の名を消している。李時珍のころは青州〔山東省益都県〕・呉中〔江蘇省蘇州市〕も産地として知られたが、晋地〔山西省〕の白礬には劣るとされていたといふ。

于氏の挙げた廬江県は、上記無為県の西隣りにあるが、おそらく近代になって開発された坑区なのであろう。

- [44] 大写意画 写意画というのは写生画とちがって、対象によって触発された画者自身の内面世界・意想を主観的に表現した画ということになるだろうか。水墨画はもちろん、中国画の大部分は、その点からすれば写意画である。「大」とあるのは文字通り大画面をいっているのであろうが、それが着色されていて、かつどうきひいていないというのは、あるいは宮殿や石窟・墓室などの壁画を指したものであろうか。于氏のいわんとするところが、もう1歩ははっきり掴めない。

- [45] 六吉料半・六吉棉連 穆孝天著『安徽文房四宝史』(1962年、上海・人民美術出版社p.10)によると、清時代、安徽省涇県に汪六吉という人物がおり、宣紙(宣州、いまの宣城県を)と総称される紙の1種として「汪六吉紙」を生産し、世界第1の紙だと自負したといふ。六吉は汪六吉の名であらう。

「料半〔紙〕」は「宣紙」の別称で、やや赤味を帯びた紙といふ(文献13)。「棉連〔紙〕」は緜連・緜連とも書き、これも宣紙の1種で比較的薄く拓本紙として多用される。

- 【補説】 ここで前稿、第1節の補注〔48〕、鹿膠・鰾膠・牛膠について補説する。いずれも『歴代名画記』(前稿、于氏原注〔2〕所引)に出てくる品名である。

鹿膠 『神農本草経』にいう鹿角膠のことであらう。『本草綱目』に白膠を標記し、異名として鹿角膠を挙げている。『名医別録』に「白膠は雲中〔ひろくとれば大同市を中心に、山東省北部から内蒙古自治区にまたがる地域〕に出づ」とある。また『新唐書』

(卷37、地理志1)には白膠貢進地として靈州(寧夏回族自治区靈武県)・薊州(河北省薊県)の名がみえる。長城沿いの地帯が主産地だったらしい。

ひょう 鰾膠 鰾は魚のうきぶくろ。長広氏は「魚背骨と腸管の間の膜囊」と注記している(文献7、p.126)。『本草綱目』(卷44)は「鰾はすなわち諸魚の白脬ほう〔ほうこう〕。その中空にして泡のごとし、故に鰾という」といい、あわせて「諸鰾はみな膠を為るに可なり。しかして海漁多くは石首〔いしもち〕の鰾をもってこれを作る。(中略)物を黏するにはなほだ固し。これすなわち工匠日用の物にして、記籍は多くこれを略せり」と書いている。産地としては『歴代名画記』は吳中(江蘇省蘇州市)を挙げ、『宋史』(卷88、地理志4)は「通州」(江蘇省南通市)鰾膠を貢す」と伝えている。

牛膠 『歴代名画記』が「東阿の牛膠」というところを見ると、これは阿膠のことにほかならず、例の「百年傳致の膠、云云」はその敷衍であろう。

## 文 献

1. 真壁仁著『紅と藍』(平凡社カラー新書)、1979年。
2. 塩田力蔵著『東洋絵具考』、昭和17年、アトリエ社。
3. 桑原利秀・安藤徳夫著『顔料及び絵具〈改訂版〉』(共立全書)、昭和47年、共立出版。
4. 小口八郎著『古美術の科学』、1980年、日本書籍。
5. 愛知大学中日大辞典編纂処編刊『中日大辞典』、1968年。
6. 蔵勵蘇等編『中国古今地名大辞典』、1931年初版(本稿では1933年再版によった)、商務印書館。
7. 唐・張彦遠著、長広敏雄訳注『歴代名画記』1。(東洋文庫)、昭和52年、平凡社。
8. 米沢嘉圃稿「中国古代における顔料の産地」(『東洋文化研究所紀要』第11冊、昭和31年11月)。
9. 唐・段成式著、今村与志雄訳注『酉陽雜俎』3。(東洋文庫)、1981年、平凡社。
10. 『日本国語大辞典』、小学館。
11. 京大東洋史辞典編纂会編『新編東洋史辞典』、昭和55年、東京創元社。
12. 前川文夫等改訂編集『牧野新日本植物図鑑』、昭和52年、北隆館。
13. 諸橋轍次著『大漢和辞典』、大修館書店。
14. 明・宋応星著、藪内清訳注『天工開物』(東洋文庫)、昭和44年、平凡社。
15. 小野勝年訳注『歴代名画記』(岩波文庫)、昭和13年、岩波書店。